

《大学史の源流を訪ねて：大阪市立西華高等女学校》

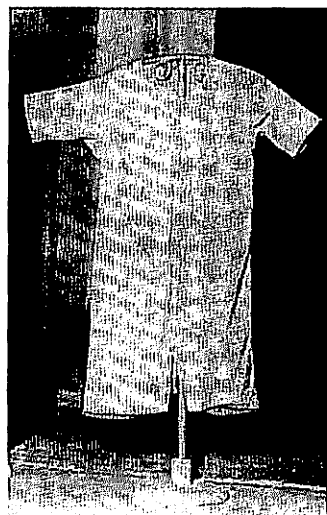
大学史の源流を訪ねて

—大阪市立西華高等女学校*—

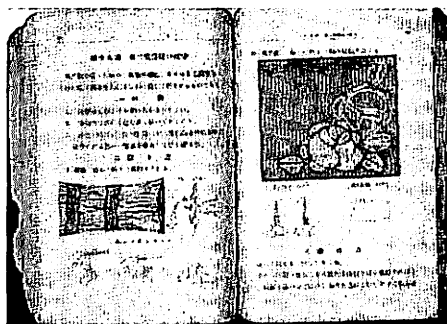
小 池 志 保 子

大学史資料室に1冊のセピア色のアルバムがある。そこには、ワンピース姿で凛として立つ女性達が写っている。表紙に昭和13年と書かれたそのアルバムをめくっていくと、帽子やベビー服、スリッパなど、彼女達の作品が写っており、その懐かしくも丁寧な佇まいに魅せられた(写真1)。当時は戦時下で、綿製品の物資統制がはじまっており、自由に裁縫が出来るような状況ではなかった。しかし、そのような状況だからこそ気品を持とうとする、そんな雰囲気がアルバムには詰まっていた。

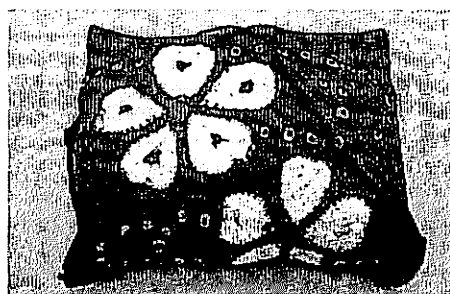
当時の教科書を見ると、絞り染めの方法がイラストで記載されている(写真2、3)。色あせてしまった布を美しく甦らせるために、絞り染めを施して染色する。あるいは、靴下を美しく繙う方法がある。使い回しの中にも生活を楽しむ知恵である。



(写真1)「昭和13年支那事変はじめ頃」
アルバムよりベビー服

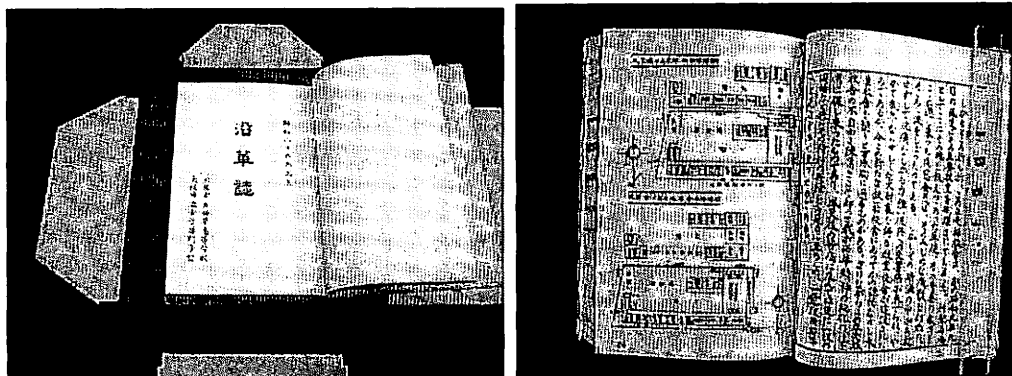


(写真2)「女子青年家庭科教本」巻三
(1940年) 122～123ページ



(写真3) 絞り染めの実習作品(製作：佐野智恵)

* 大阪市立大学生活科学部の前身校の名称は、大阪市立西区高等実修女学校(1921年)、大阪市立高等西華女学校(1924年)、大阪市立西華高等女学校(1941年)、大阪市立女子専門学校(1947年)と変遷している。ここでは、寄稿していただいた古作・佐野両氏の在籍年度にあわせ、大阪市立西華高等女学校の名称を用いる。



(写真4)「沿革誌」(大阪市立西華高等学校 大阪市立女子専門学校、1951年)

そうして見ていくと、環境への配慮が求められる現在の社会状況とアルバムに写っている当時の状況に共通点があるように思えてきた。もったいないという言葉が見直される最今と、端正な暮らしを戦時下実践しようとした実修学校、共通項があるような、まったく正反対のような。小さなことかもしれないが、日々の暮らしを大切にしながら、知恵を凝らす。そのような視点にこそ、現在の環境問題に通じる糸口があるかもしれない。

このアルバムを手掛かりに、大阪市立高等西華女学校から大阪市立女子専門学校、そして大阪市立大学につながる源流を辿ってみることにした。アルバムは、大阪市立高等西華女学校時代のものである。その後、1947年には、女学校の本科につづいて設けられている専攻科が大阪市立女子専門学校という高等専門の教育を実施する機関となり、1949年にはその専門学校が大阪市立大学へと発展した。それに伴って女子専門学校が閉鎖されることになり、その時に作成された『沿革誌』が資料室にある。厚さ4センチにもなる立派な冊子には、当時の教育が丁寧に記録され、戦時下の教育の困難さなどが記されている(写真4)。非常勤講師の名前も挙げられ、テキスタイル・デザインを手がけた上野リチ(1893～1967)という名前が目をつけた。近ごろ、作品が再注目を集めている人物で、2009年には「上野伊三郎+リチ コレクション展；ウィーンから京都へ、建築から工芸へ」という展覧会が京都国立近代美術館で開催されている。大胆にデフォルメされた植物とやさしく鮮やかな色使いの図案がとても印象的なデザインである。当時、そのような一流の人が女子専門学校に教えに来ていたのである。

ところで、大阪市立大学にはいくつかの源流がある。1880年まで遡る「大阪商業講習所」から「大阪商科大学」を経て本学につながる流れをはじめとして、大阪市立都島工業専門学校、大阪市立女子専門学校、大阪市立医科大学を前身とする4つの流れである。これらの源流がつながって、総合大学としての大阪市立大学に辿りつくのである。

前述の大阪市立高等西華女学校は、1921年に創設された大阪市立西区高等実修女学校からはじまるもので、1924年に大阪市立高等西華女学校に改称された。この実修女学校は、今回、文章をお願いした卒業生の2人が触れている通り、家庭生活と社会生活を切り離すのではなく「一単位として見、この二生活を有機化」しようという教育を掲げていたという。実修に重き

を置いた学校という特徴を持っていたのである。そして、1949年の学制改革により、大阪市立大学へと発展している。この源流は、現在の大阪市立大学生活科学研究科につながっている。当時は、4年生による男女共学の家政学部として、後の1975年には、博士課程を持つ生活科学部として、全国に先駆けることになった。

2人の卒業生から当時の様子について寄稿してもらえることになった。大阪市立高等西華女学校で学んだことを生かしながら活躍したお2人である。どちらも、1939年に大阪市立高等西華女学校に入学し、専攻科を含めて8年間学校に在籍している。古作ケイ子さんは染色が専門で、卒業後も学校に残り、女学校が大阪市立大学となった後も助手をしていた。その後は園田学園女子短期大学で教授を務めている。佐野智恵さんは、故郷の新潟の小学校や中学校、高等学校などで教鞭をとっていて、先ほどの絞り染めの作者でもある。話を伺ううちに、二部式和服という作品も資料室に寄贈してくださった。そして、第22回展示「大阪市立大学の学術標本；Z衣服生活運動関連資料；戦時期のエコとファッション」にて、絞り染めの作品や当時の教科書などの展示が実現した。今回の寄稿では、当時の日常的な学校の様子や教育方針などに触れていただいている。

参考資料：大阪市立大学125年史編集委員会『大阪市立大学の125年』大阪市立大学、2007年

(こいけ しほこ・大阪市立大学生活科学研究科助教)